

アセスメントプロセス解明のための探索的調査

—初任者とエキスパートの比較—

- 日本福祉大学 大谷 京子 (会員番号 002998)、吉田 みゆき (同朋大学・004027)、
田中 和彦 (日本福祉大学・007020)、寺澤 法弘 (日本福祉大学・005898)
キーワード：ソーシャルワーク、アセスメント、精神保健福祉

1. 研究目的

アセスメントはソーシャルワーク実践の中心概念であり、良質なアセスメントは有効なソーシャルワーク実践の礎石と言われている。クライアントが直面している問題やニーズの把握、状況の把握とニーズが生起するメカニズムや背景を理解すること、取り組むべきニーズを確定することを目的に行う、認識プロセスである。さらに、状況を改善するために何を必要があるか計画する基盤であり、実現可能性、計画実施のために必要なサービスと資源の情報を集めて判断することを含む (Parker & Bradley 2003)。したがってアセスメントとは、個別のクライアントに関する情報 (事実の蓄積のみならず解釈を含む) と、ソーシャルワーカー自身や、所属する機関を含めた、利用可能な社会資源に関する情報の両方を収集し、ソーシャルワーカーとクライアントが共同で主観をすり合わせながら理解するプロセスである。したがって、何重にも個別な要素の介在する、標準化が至極困難なプロセスであり、ひいては伝達の難しいスキルである。

それでも、多様なアセスメントツールが開発され、領域ごとの収集すべき項目のリストの提示や、モデルやプロセスの検討など、多くの先行研究の蓄積がある。しかし、アセスメントに関しての具体的内容や作業方法について共通認識は得られていない。何に留意し、何をを行うのかについては、未整理である。中村(1996)は、アセスメント研究に求められる普遍的課題は、①アセスメント概念の本質的理解、②アセスメント機能の固有性、③アセスメント方法の具体化、④アセスメント展開の実用性からの考察であるとした。

本研究ではアセスメント方法の具体化に焦点を絞り、情報収集とその組み立て方法を明らかにすることを目的に、探索的調査を行った。また領域や目的によってアセスメントの評価対象も方法も異なる。そこで精神保健福祉領域の危機介入以外の場面に限定し、経験年数の浅い実践者とエキスパートのアセスメントの違いを明らかにすることで、アセスメントスキル向上のための課題の抽出を目指した。

2. 研究の視点および方法

2011年10月22日に、経験年数3年未満のPSW6名(所属は医療機関3名と施設3名)を調査協力者として、初回面接のロールプレイを用いた探索的調査を行った。調査協力者の内5名のPSWが、クライアント役のPSW1名に対して情報収集を行い、その後アセスメントを行った。その様子をすべてICレコーダーで録音し、記録のノートを取った。録音デー

タは逐語記録として起こし、記録ノートと合わせて分析に用いた。

分析は、調査協力者の 1 つ 1 つの質問が、先行研究で挙げられている、どのアセスメント項目にあてはまるかを検討し、どの程度全体を網羅した情報収集ができたかを確認した。次に面接技術に注目し、それぞれの質問について、使われている技術と何に焦点を絞っているかを検討した。最後に調査協力者が得た情報を基に、研究グループメンバー（経験年数 10 年以上の PSW）もアセスメントを行い、結果を比較した。

3. 倫理的配慮

ロールプレイで用いた架空事例については、紙媒体にせず、クライアント役の PSW がロールを展開するにとどめた。事例作成にあたりモデルとなった当事者には、クライアント役の PSW から口頭で調査について説明し、了解を得た。調査協力者には研究の趣旨を口頭で説明し、録音データは研究以外の目的では使用しないことを約束し、調査協力の承諾を得た。その他は日本社会福祉学会研究倫理指針に従った。

4. 研究結果

調査協力者たちは、アセスメントに必要とされる基本的項目についての情報収集はできていた。ただし、以下の課題も見出された。① PSW からの質問に対するクライアントの回答の背景を理解するには至らない、② 本人の希望や価値観といった要素の必要性を理解していない、③ クライアントの発言をそのままアセスメントにおいても用いており、情報の組み立てができない、④ 項目としての情報から仮説を立てられない、⑤ 理解を深めたり、PSW 側の理解や認識を伝えたりするための、面接技術の習得が不十分である。

一方研究グループメンバーは、1 つの事柄から背景を想像し、仮説を立てるという作業をしており、同じ情報から全く異なる厚みのあるアセスメントを導くことができた。

5. 考察

経験年数 3 年未満の PSW は、アセスメント項目に関する情報収集をすることはできても、それらの背景を理解したり、個々の情報を組み立てたりするところに課題があることが示された。その原因としては、① どのような情報が必要なかが不明確であること、② 情報を組み立てていくスキルが不足していること、③ 情報収集するための面接技術が不十分であること、④ PSW 側に経済状況や病歴など「踏み込めない」と勝手に想定している領域があることなどが考えられた。

クライアントの全人的理解のためには、表層的な項目や事実の列挙ではなく、意味によって重みづけられた情報が組み立てられる必要がある。したがって、アセスメントに必要な深みのある情報収集のスキルと、その情報の組み立てのスキルを明確にし、それらを教育するプログラムの開発が今後の課題となる。

本調査は、平成 24 年度文部科学省科学研究費基盤 (C) の助成(課題番号 23630778)を受けて実施したものである。